

## 「国際化」とは何だろう —— 個人的体験に基いて

森 宏

## はじめに

「今や、“米は一粒たりとも入れない”は、国際的に通用しない」と盛んに言われるようになった。学者や評論家のみならず、保守派の政治家の間ですら、間を置いて聞かれるこの頃である。この種の発言を聞いていつも気になるのは、一体「国際的に」とは具体的に何をさし、「通用しない」とは具体的にどういうことを意味しているかである。

経済サミット、GATTあるいはOECDの経済閣僚会議などの国際会議の席上やパーティーの場で、日本の代表が難詰されたり、皮肉を言われることは、稀ではないだろう。それならこちらはこちらで、「金もないくせに、ひとの金を当に、1日何億ドルもつかって“戦争ごっこ”などよくやられますね。日本には“人のフンドシで角力を取るな”という諺がありますが」くらい言って、しらっとしていれば良いのである。英語かフランス語でそれくらいの方が言えないと、国民の税金を使って外交の席に出る資格はない。どうせ英語が下手

## 目 次

「国際化」とは何だろう —— 個人的体験に基いて ——	森 宏	1
はじめに		1
「アメちゃんはずるい」		5
「いつもお世話になっています」		8
おわりに		11
国際学会開催を手伝っての感想	松浦 利明	14
<編集後記>		20

なら、「近年DDTが手に入らなくなったから、ライス (rice…しらみ) の輸入は国民衛生上困るのですよ。次回は農水省の係官でなく厚生省の人間を連れてきます」と、意図せざるブロークン・イングリッシュでやりかえせば、相手も二の句が継げなくなるだろう。

本論に戻って、先の設問の「国際的に・通用しない」は、極めて多くの場合、(そうなると)「アメリカは、スーパー301条を発動して、わが国からの自動車、家電製品、ハイ・テック製品などの輸入を禁止する、ないし厳しく制限するだろう」と言い換えて、発言者の意図は損われないように思われる。

「国際的に・通用しない」が、アメリカが自動車の輸入を大幅に制限するの意味であるとすれば、筆者は自信を持って、そんなことはまず起こりえないと、言うことができる。

筆者が殆ど毎年、春と夏の休みを過ごすニュー・メキシコ州立大学、あるいはアイダホ大学の教職員の駐車場に並ぶ乗用車のうち、比較的新しい車の少なくとも3分の1は、日本車である。西海岸のたとえばロス・アンジェルス近くのフリー・ウェイを走っていると、前の車が2～3台、左も右も、筆者の運転するバーゲンでかりたレント・カー以外は、すべて日本車ということが珍しくない。大学の事務所にあるおそろしく精巧なコピー・マシンも日本製。最近では農学部には一台ではなく、各学科あるいはさらに細分されたコンパートメント毎に設置されているファックス・マシンも、日本製である。

家庭でも上等なオーディオ、ビデオ・カセット・レコーダー、ビデオ・ムービー・カメラ、高性能マイクロ・ウェーブ (電子レンジ) などなど、殆どが日本製である。

しかも、もっと重要なことは、いささか不思議なことに、近年の円高 (ドル安) にも拘らず、自動車、家電製品、高級カメラにせよ、小売価格がドル建てで、わが国よりかえって安いことが珍しくないことである。

日本の消費者に比べ、アメリカの消費者は辛抱が良くない。グラス・ルートの民主主義意識が強いと言い換えてもよい。かつてわが国に牛肉の輸入自由化を迫った時、当時のアメリカの農務長官は、テレビで日本の消費者に「あなた方は輸入制限のために、こんなに高い牛肉を買わされている。われわれと一緒に日本政府に自由化を強く働きかけましょう」と語りかけたことがある。それに対してわが国の生協グループのみならず、いまだし保守的な消費者団体などからも、期待した程の反応はなかったとのことであった。米 (ライス) については日本の消費者の多くは、少なくとも筆者の知っている農水省の若手の事務官達よりも、完全自給派に近い。

その点、アメリカの消費者は違う。ひとによって、「もっと目覚めている」と表現するかも知れない。スーパー301条の適用により、かりに日本車の価格が10～20パーセントも上るよう

なことがあれば、彼等は黙ってはいない。筆者の知人の子供で、ビデオ・ムービー・カメラを買うべく、せっせとアルバイトをしながらコツコツ貯金している学生がいる。かれ（ないしかれの友人達）は、どの店で、どのメーカーのものが、何時頃幾らくらいになったなどの情報に極めて関心がある。もしスーパー301条が、ビデオ・カメラに適用され、当てにしていたアフター・サンクス・ギビングの「大バーゲン・セール」がパーにでもなったら、黙っている筈がない。

とすると、拳を振りかざした手前、かりにスーパー301条を適用するとしても、多くの消費者および産業にとって余り実害のない、たとえば洋食器とか、アメリカでも自給できる低性能の半導体というようなものになるのがおちだろう。

アメリカにとって、生産者のみならず消費者にとっても、小麦には大いに関心がある。従って、ECが輸出補助金を使ってこれ迄のアメリカの伝統的輸出先を侵害したとなると、マス・コミも大きく報道するし、小麦の生産地帯でないところの消費者だって心穏やかではない。

しかし筆者の知る限り、米はアメリカの代表的な農産物ではないし、いかなる意味においても象徴的な商品ではない。筆者の知人に、キャディラックのことを「あのモンスター・タンク」とけなすのがいるが、ついこちらが気を許して「アメ車」の悪口を言い出せば、彼の顔色は変る。「カナダの小麦の方がアメリカの小麦より品質的\*にすぐれている」と言えば、大半のアメリカ人は、小麦生産者でなくとも、何とか言うだろう（\*小麦といっても、種類は多いのだが）。

過日ある研究会で経企庁の吉富氏が、「日本のマス・コミでは、GATTのウルグアイ・ラウンドの中心議題は、日本の米市場開放問題みたいだけど、GATTの事務局の連中と話し合っても、日本の米なんて殆ど話題に上ったことがないのですがね」と言われた。筆者は吉富氏程の国際経験の広さも深さも無いが、大いに同感する。

筆者は農水省の研究機関に奉職中、1964～66年の2年間、アメリカの大学でPost-Doc.の研究生活を送った。我ながらよく勉強し、よく仕事もしたと思うが、エネルギーの半分は、当時エスカレートし始めていたヴェトナム戦争反対に費した。おかげでアメリカ人とけんかするのには慣れた。南米のある国から来ていた大学院の学生が、「アメリカの大学院生達がお前のこと怒っているぞ」と親切気に忠告してくれたが、「何！怒っているのは俺の方なんで、アメリカは一体よその国にのこのこ出かけて行って、如何なる大義でほこ人殺しが出来るのか」と言いかえしたことがある。大学院の学生達がホールですれちがい際に、「ハイ！コミュニスト！」と挨拶するので、「一体俺を何だと思っている。俺はもっとラジカルだぞ。

これからトロッキストで呼んでくれ。もっともお前達は、レニン、スターリンとトロッキーの区別もわからないだろうが」と毒づいたものである。当時はその大学のジムでも空手の練習などやっていたので、なぐられることもなかったし、「こんな奴等2～3人に負けるものか」と強気であった。

大事なことは、そういう風に気儘に振舞いながら、筆者の本来の研究生活に支障が生ずることもなく、かなり熱心に「残らないか」とすすめられたことである。真実、あの当時からヴェト・ナムのことで最も激しくやりあったビル・ゴーマンと、その後も関係が続いている。1983～84年、本学の「長期在外研究」をさせてもらった大学もかれのところであり、アメリカ農務省の公式の輸出関係の annual report にも、89年と90年の2回、日本の牛肉輸入に関し、連名で special articles を出させてもらっている。

筆者は欧州は殆ど知らない。アジアもFAOなどの関係で、バンコック、ソール、台北などの会議に出かけるくらいで、会議での耳学問の域をこえていない。牛肉輸入問題とのからみで、89～90年、オーストラリアとニュー・ジランドを延べ3ヶ月程旅行したが、ほんの垣間見た程度にすぎない。筆者の「国際」は、古くは1940年代後半、終戦直後の高校時代のバイブル・クラスに始まり、アメリカ文化センターの英会話教室、散会後の喫茶店でのインテリ・アメリカ軍人のおしゃべりから、アメリカ大使館でのアルバイト、64～66年の初めての留学、……現在に至る、殆どアメリカという国、というより、アメリカ人達との「際」＝ふれ合いである。

アメリカと一口に言っても、北部と南部、東部と西部で、歴史も違うし、風土も一様ではない。アングロ・サクソン系とラテン系では、随分違うと言われている。後でもふれるが筆者の義兄弟（義妹の亭主）のイタリー系のAIは、「自分はアメリカを支配するアングロ・サクソンとは断然違う」と、事ある毎に主張するが、筆者には彼はきわめて典型的な「アメリカ人」であり、この2～3年知り合った幾人かのイギリス系のオーストラリア人やニュー・ジランド人とは著しく異なるように思える。しかしそういう人達も、内部的に大きなバラツキがあるにせよ、「日本人」とは違う。

1986年末から、中国出身のアメリカ人の研究者、リンと一緒に仕事をしてきたが、かれは、西洋と東洋という筆者の2分割に、重大な疑問を呈している。顔・形が似ているせい、またともに英語にアクセントがあることに甘えるせい、口に出さなくともわかり合えるといついつい思い勝ちだが、つき合いが進むと、コミュニケーションは決して容易ではない。

以下節を変えて、「国際化」の難しさを、主としてアメリカ人とのつきあいを中心に、体験的に述べてみたい。

## 「アメちゃんはズるい」

「シントロウ、これやってみる？」は、ビヤーズ家の長女ワンダ（当時11歳）の、愚息晋太郎（同じく10歳）に対する“問いかけ”である。所はハワイ、パール・ハーバーの山沿いのビヤーズ家の玄関のポーチ。時は1973年の暮。73年度から本学の教員に採用してもらった筆者は、子供達に早目に冬休みをとらせ、64～65年の2年間インディアナ州パーデュー大学当時何かと世話になり、その後も家族ぐるみで親しくつきあいをしてきたビヤーズ家に、一家揃って、ハワイでエレガントに冬休みを過ごすべく、ころがり込んでいた次第であった。

アメリカ、少なくともハワイの小学校には日本の様な冬休みはない。ワンダと妹のタニヤ（8歳）は、7時半前に廻って来るスクール・バスで学校に行く。海岸は歩いていける距離ではないし、赤ん坊を除いて近くに遊び相手の子供達はいない。うちの子供達にとって、昼過ぎにワンダ達が帰ってくるのが待ち遠しい。

ところが、ワンダ達の小学校が、当時特に力をいれていたのかどうかかわからないが、彼女達はきまって算数の宿題を持ち帰る。しかとは覚えていないが、ワンダは分数の加減・乗除、タニヤは2けた数字の加減・乗除などが中心であった。筆者の子供達が特にできる方だとは思わないが、上の晋太郎はすでにそろばんの3級を取っていたし、下の雄二郎（8歳）は4級に再度挑戦という時期であった。それぞれにとって、ワンダ達の持ち帰ってくる算数の計算問題は、あつという間の類いである。

宿題が終らないと、遊ばせてもらえない。しかしワンダ達にやらせておくと、延延と時間がかかる。筆者の子供達は朝から待ち侘びているのである。そこでワンダの、「シントロウ、これやってみる？」が出てくることになる。まわりに日本語の本もないし、やることといえば兄弟喧嘩くらいしかない愚息達にとって、やること自体それ程大きな負効用でないし、宿題を早くすませれば、遠く迄「探検」にもいける。

はじめの2～3回はいい。しかしワンダ達が帰ってくる度に、算数の宿題は必ず自分達がやるものということになると、限界負効用はやや大きくなるし、「これやってみる？」では、いささか頭にくるというものである。しかし一たんそういう慣行が出来上がってしまうと、「いや、僕今日はやってみない」とは言い難いのが、子供とはいえ矢張り日本人である。

そこへ「晋太郎ちゃん達、アメちゃんは子供でもズるいんだから、いやならいやと言っていいのよ」、他方“Hey! Wanda and Tanya. Shame on you. Why can't you do your home works for yourselves?”と、ワンダ達の母親のハルミさんの2声。

ハルミさんは九州佐世保の出身、そこで知り合ったアメリカの水兵さんラリー・ビヤーズと結婚。優秀なラリーは選ばれて、筆者がはじめて留学した頃、同じパーデュー大学のEE

(電気工学)に在籍し、アパートも近くで、家内達は毎日のように行ききしていた。その後大学院の修士を終え、ラリーの船が東アジアを巡航中、ハルミさんは1年余り子供達を連れて実家に帰っていた。従って子供達、特にワンダは結構日本語ができるという訳であった。

大学院当時、アメリカ大使館や関係機関でアルバイトをして、アメリカ人のことは結構知っていたつもりであった。1964～66年の2年間留学し、当時の日本人としてはそう会話に不自由しなかったので、アメリカなりアメリカ人に対する理解は、ヴェトナムの事を除いては、肯定的にかなり広く・深くなっていると思っていた。

3週間にわたったハワイのビヤーズ家での滞在は、筆者のアメリカ理解を正しく深くするものであった。3週間の滞在は、家族4人完全に「居候」であった。それ迄のアメリカ人とのつき合いは、こちらが助けてあげたり、全くの「ダッチ」か、あるいはほんの2～3日の「お客様」であった。したがって、相手はこちらに対し十分にフランクではなかったように思われる。

その点ハワイでの3週間の間、ラリー・ハルミ夫妻も、かれらの子供達も、十二分かどうかは別として、筆者夫婦にも、子供達に対しても、「アメリカ人として」、振舞ったように思われる。

ハルミさんはそれ迄も筆者達に対し、「森さん、ラリーはアメリカ人だから、遠慮しないで何でも頼んでいいですよ。いやだったり、出来ない時は、No.と言いますから」、他方「ラリーや子供達は遠慮がないから、いろいろ身勝手なお願いをするかもしれませんが、いやならはっきりNo.と言って下さい。断わられてもともとと思っているから、別に森さん達が気を遣われる程傷つくことはありませんから」と、幾度となく忠告してくれていた。ビヤーズ家に3週間「居候」して、ハルミさんの上記の忠告が、ある程度日常の生活実感として、わかったような気がした。

そう言ったからと言って、ビヤーズ一家が「居候の」われわれにつれなかった訳では毛頭ない。ハワイでの3週間は、New Year's Eveのパーティーで、調子の乗って飲みすぎ、屋外のトイレの便器に座ったまま眠りこけて、親切なお客さん達も含めて皆で筆者を探しまわり、家内がはなはだバツの悪い思いをしたこと以外は、毎日が楽しく、充実していた。その後20年近く、ビヤーズ家との交流は温く続いている。

「(シンタロウ)これやってみる?」は、舌足らずの子供達だけの世界に限らない。筆者の義妹夫婦の場合、ディレクトに英語の世界だけに、もっとこわい。

家内の妹のF.は、10年以上前からアメリカ人のフリー・ランスのcar-specialistのAl.と結婚している。彼と結婚する迄、10数年外資系の会社でセクレタリーをしていたから、英語

は“インテリ”日本人としては、達者な方であった。彼と結婚してアメリカに移住して以来、つい最近迄は主婦専業であったので、特に仕事はない。

クラシック・カーやオート・レースの専門家である Al. は、雑誌の原稿やら自らの著作なり、書くことが多い。一緒に住み始めて間もなく、義妹は“Hi! F. You wanna (want to) type this for me?”に、毎日のように遭遇することになる。それ迄の会社勤めでは経験しなかった expression である。

literally には、「あんた、これ、僕のために、タイプしたいかい or よね」である。全く車のことに関心のない義妹にとって、すさまじい手書きの、「何十年前のレースで誰がどういう車種に乗って、どうだった」の類の文章は別世界のことで、読む気持ちにもならないし、ましてタイプしたい気持ちなどする訳がない。

しかし大学の教育およびその後の職場でそういう表現に慣れていない義妹は、「Fちゃん、これタイプしてくれない。Sweet Heart?」くらいの、夫婦の間の、くだけた頼み方くらいに思い、その後、細かい技術的な解説にみちた幾冊もの専門書の、最も信頼できる、専任・無料タイピストを勤めることになる。

はじめの頃義妹に、「ヒロシ兄さん、Al. は“you wanna”（したい）というけど、私全然したくないのよね」とこぼされたことがある。英語の機微に疎い筆者は、無責任にも「Fちゃん、Al. も夫婦の間で“Could you please?”とも言い難いから、てれてそういつてるんじゃない。別に他に仕事もないのなら、タイプしてやってもいいのではない」などと言っていた。

しかし夫婦の間の善意でやっている仕事でも、期限をきる、ミスが生ずると原因は自らの原稿の不備にあるかもしれないのにこちらをなじる、……ということになると、幾らお人好しの F. も心穏やかでない。彼女のぼやきを聞き、上述のラリー（・ビヤーズ）や、他に日本語のよく出来るアメリカ人にたずねてみた。“You wanna”は夫婦や親しい者同志の間の、intimate な依頼の表現なのかと。答えは、No. であった。「Wanna はあく迄で、want to, すなわち“…したい”であって、夫婦の間であっても、したくないなら、はっきり No. とすべきである」、「したくもないのにいやいややって、ミスをすれば、それはやった方が悪い」が、アメリカ人全員の答えであった。

しかしそういう関係が10年近くも続くと、「Hi, Honey! You wanna…」と肩をだかれ、“チュ”でもされると、“No. I do not want to”とはいいにくい。F. は現在外でフル・タイムで働いているが、今でも週末まで Al. のむつかしい原稿のタイプに忙殺されている。

## 「いつもお世話になっています」

ここしばらく取り組んできた牛肉輸入問題の重要な情報源の1つ、某事業団に電話して「〇〇大学の森と申しますが、企画室の誰々さんをお願いします」と言うと、きまって「いつもお世話様でございます。暫くお待ち下さい」という交換の声がかえってくる。役員室にかけると、もっと丁重である。1年に1～2回、委員会や研究会で「奉仕」することはあるが、9割がたはこちらが、いつも、大変お世話様になっている。従って最近ではこちらの方から先に、「〇〇大学の森と申します。いつもお世話になっています。何々さんいらっしゃいますか」と言うことにしている。この事業団だけでなく、業界団体などに初めて取材の電話をするときも、この手で行くが、事実のいかに拘らず、「お世話になっています」を付けるか付けないかは、しばしば大きな違いをもたらす。「誰々さんお願いします」、「会議中です」「がちゃん」ではなく、「申し訳ございません。只今会議中でございます。終わりましたらこちらから御連絡申し上げますが、どちらにおかけすればよろしいでしょうか」くらいの差が生ずる。

大学関係や研究者の間でも自宅に電話した場合、「〇〇大学の経済の森と申します。誰々先生御在宅でしょうか」と言うと、奥さんがでられるとまず80パーセントくらい、全く初めての人でも、「主人がいつもお世話になっています。しばらくお待ち下さい」という応対がかえってくる。いまだかつて“お世話した”ことがなく、その電話の用件も、こちらからその先生の専門領域の事で質問する時においてすらである。

さて、前出のビル・ゴーマンとの関係では、何も100対0とは言わないが、70～80対30～20位の程度で、筆者の方が彼の「世話」をしてきた。1964～66年に、中西部の各都市の食品の小売価格と食品チェーンの集中度の関係を調査・分析した仕事では、アメリカ農業経済学会の10年に1度のエッセイ・コンテストで佳作ながら賞をもらったし、別の論文も同学会のジャーナルに掲載された。この研究のテーマと研究費はゴーマンがみつめてきたが、マーケット・バスケットを構成する160品目以上の商品を選択することから、22都市の消費者モニターから毎月送られてくる主要店別の調査票をチェックし、“くさい”ときは、200～300マイルもドライブして行って、自ら照合したり等々、結構大変な仕事であった。まだコンピューターがなりばかり大きく、プログラマーも不慣れで、なかなかいい計算結果が出ないのを、こちらはモンローの“がちゃがちゃ計算機”で手計算をし、細かなチューニングをやった。ゴーマンは朝は早い、5時にはちゃんと自宅へ帰る典型的なアメリカの良き夫、良き父親であった。筆者は一応ケリがつく迄は、研究室をはなれられない典型的な日本の男であった。

関係論文にも目を通し、上述の2つの主要論文も最初のドラフトは筆者が書いた。ゴーマンが主としてやったことは、「こういう表やこういう説明では、お前以外は誰もわからない」



といったコメントであった。かれのコメントに従って論文が良くなったかもしれないが、もしかすると、変に妥協せず、筆者の“地”を通した方が、かえってより訴える力のある論文になっていたかも知れない。ただゴーマンの名誉のために繰り返しておかねばならないのは、研究のテーマと、調査費をとってきたのは彼であって、直接費だけで当時の金で500万円くらい使ったように思う。特に近年のアメリカの学界のように研究費がタイトになると、研究費をとってくること自体で、すでに60~70ポイントになるとみるべきかもしれない。

となると、逆に1983~84年1年間と、それから毎年ほとんど夏と春の2回、2ヶ月づつ、筆者はほとんどみずからの生計費(と多少の貯金)をけずって、ゴーマン\*のところへ出かけている(\*うち3回は後からわれわれに加わったアイダホ大学のリンのところ)。日本に居る間にデータを集め、毎回リング函いっぱい資料をかついで行き、分析し、毎回1つか2つのペーパーを書いてきている。ゴーマンが提供してくれるのは研究室(国際通信も全く自由なワットライン付)、豊富だが余気をぬけない助手とコンピューター、きわめて有能なセクレタリーである。加えて、かつてと同様、「この図は世界中お前以外には理解できない」と、言わずもがなだが、「英語の文法に問題がある」の「ケチ」である。やたらとむつかしい数式を使うくせに、こんな推論も理解できないとは、「アメリカ人て何と頭がお粗末なのだろう」と思わないことはないが、おかげ様でこの年になって、少しはましな英語がかけるようになったのは有難いことである。

随分くどくなつたが、要するにこのところ、少なくとも日本の牛肉輸入に関する研究では、筆者がゴーマンの「世話」をしてきた。ある初老のアメリカ人の研究者の言葉だが、「お前はゴーマンを有名にした。今度は俺にしてくれる番だ」。恐らくこれはかなり正しい陳述である。ゴーマンが損をしているのは、1964~66年のパーデュー大学の時もそうだったが、かなり遠くの人からにまで、そうみられることである。

筆者が春と夏アメリカに行くときは、家内がついてきて、筆者は大学に着いたその日から仕事を始め、飛行機が出る2~3時間前迄、研究室で仕上げにかかることができる。アパートを見付けたり、電話をひいたり、リネンや台所用品の手当てなど、ビル・ゴーマンと奥さんのゲイルが実によくやってくれる。さもないと、短い期間に仕事に集中するのはむつかしい。

ただここで何を言いたいかといえば、ゲイルは筆者および筆者の家内に対して、これ迄1度たりとも「主人がお世話になっています」とは言ったことがないことである。英語にそういう表現がないというのではなく、そういう気持ちをもっている様子でもなく、従ってそういう態度が少しもにじんでこない。

夫婦で2ヶ月アメリカに行けば、あちらはいくら物価が安いといっても航空賃などをいれ

ると少なくとも、1回6～7千ドルはかかる。既述のように多くの場合、その大半は家内の家計簿の切りつめによって賄われてきた。何も“ペーコラ”してくれといってる訳ではない。「ヨーコ（家内の名前）、大変でしょう。ビルも随分頑張っであちこちに働きかけているから、その内に沢山研究費がくると思うわよ。それにしても貴女もヒロシもよくやってくれるから、ビルもすごく感謝しているのよ」くらいのことは言ってくれて、口が曲る訳ではなし、それくらいの気持ちを持ってくれていておかしくない。国民によって、また同国人でもひとによって、表現の仕方には差異があるであろうが、そういう感謝の気持ちは、おのずとこちらにも通じてきて、ひととひとのコミュニケーションはうまくいく。

それにしても、若い共同研究者のリンの場合でも、別の若いアメリカ人の研究者達の場合でもそうだが、どうも奥さん達が、「うちの主人がお世話になっています」と言うような習慣というか、心の持ち方は、そもそもないのかもしれない。

家内が言うのだが、「アメリカ人はうちによんで御馳走したり、割といいレストランで大枚をはたいても、次に会ったとき、“先日はどうも”と言われたことがない」。筆者も長年のアメリカ人とのつきあいで、同様なことを感じてきた。

大した御馳走でなくとも、「ヨーコは料理の天才だ。こんなすばらしい（たとえば）春巻きは、サンフランシスコのチャイナ・タウンでも食べられない」とほめそやし、パーティーのあとの皿洗いも手伝ってくれる。“Thank you. Good night”で、一件落着であり、そのことはあとに持ちこさない。

その点われわれ日本人は、「どうも御馳走さま」程度である。少なくとも筆者は、すごいところで御馳走になっても、大抵の場合のみすごし、悪態をつかない迄も、その場でお礼を言ったかどうかの記憶がないことが多い。日本ではうちにひとを呼んでも、Thank You Cardがくることは、ほとんどない。かといって忘れてる訳ではない。その内にお返しということで、虚礼とかいわれるけれども、お歳暮などの形をとる。

ヤクザの世界ではないが、「一宿一飯」の恩義は、すぐその場ではないが、あとで何倍かにして返す。アメリカ人と日本人の間で、その点に関し決定的な違いがあるとは言わないが、アメリカ人の方がその場その場の傾向が強いように思われる。

筆者は“巳年”で執念深いのもかもしれないが、「これ迄これだけしてやったのだから…」という期待が、ゴーマン達に対しては強い。しかしハワイ大学のヤマウチは、「それはお前が悪い。お前は一回・一回きちんと条件を出すべきであった。森はただでも来て、だまって働いてくれるとなると、相手はそれが当然と思うようになる」と、筆者に点がからい。「これだけ我慢してやってきたのでから、そろそろわかってくれてもいい筈」は、国際的（アメリカ人）

には通用しないというのである。

## おわりに

今度の（ペルシャ）湾岸「危機」に関し、日本（海部首相他）はアメリカ（ブッシュ大統領他）に、いいよになぶられているという感じを持っている人は、筆者以外にも少なからずいるように思う。

はじめは10億ドル出すことにしたのが、あっという間に40億ドルになり、「日本は金しか出さないのか？」で、「はい、はい、人間も」ということで「国連平和協力法（案）」を出し、これがつぶれたことには、筆者は憲法をくわしく読んだことがないが、まあ“せめてもの”のことであったと思っている。

はじめアメリカが金も出せとやってきた時、「10億ドルって、あなた方がうるさくいつている“食管”の赤字の2,000億円とほぼ同じですよ。こんな大それたことは、私（首相）の一存ではきめかねます。日本はフセインやブッシュさんお2人の国とは違うのですから」と言うべきであった。

アメリカでは、ガソリン税（連邦税の excise tax）を1ガロン当り1セントあげれば、年間にほぼ10億ドルの増収になるといわれている。筆者が昨夏7月の終りにアイダホにいったとき、ガソリンはガロン\$1.15くらいであった。イラクに対するブッシュの対応で、ガソリンはバタバタと値上がり、9月初めには\$1.35~1.40くらいになっていた。アメリカは石油について大体50パーセント自給だから、ガロン当り20セントあがれば、国内石油資本は年率200億ドル×0.5=100億ドルの wind-fall gain をえることになる。以上の話はガソリンについてだけだから、ジェット燃料、ディーゼルなどもいれれば、ブッシュのテキサスを中心とした国内の石油資本は、年率少なくとも200億ドル、8、9、10、11、12月の5ヶ月で、少なくとも80億ドルは、「国際正義」の名のもとに、「タナボタ」の利益をえたとみてさしつかえない。とすると、ブッシュと同じ地域出身の国務長官ベーカーなにがしが日本に“たかり”にくれば、「おかど違いでは」くらいのことを言って、しらっとしていられなければ、われわれからあの手この手でとりあげた税金の使用者としては、まず国内的に、従って「国際的に」資格がない。

かりに10億ドルは出すことを約束しても、そこでしっかり念をおすべきであった。どうも日本人は他人に物をあげるとき、「つまらないものですが」と言い、相手は「つまらないもの」の背後にある並々ならぬ労苦を察してくれることに期待する。しかし筆者の、せまい個人的体験からして、それはむなしい。というより相手方をミスリードする願い・期待をのせた表

現である。

今回の湾岸危機\* (\*イラクがクウェートを“侵攻”したからといって、どうして「危機」になるのか筆者にはよくわからない)に当って、日本の首相や政治家は、まず日本の新聞を読むのをやめ、アメリカの新聞だけを読むのが良かった(そうすれば、アメリカの日本に対する期待が、実はきわめて小さいことを知ったであろう)。次にむこうから誰かがきたら、「日本経済は“金のなる樹”ではありませんから」と、日本語のみで対応すべきであった。“I am very sorry that I can pledge you only \$1.0 billion for the time being”などと、下手な英語は使うべきでなかった。その結果、30億ドル、さらに「1～3月分として」新たに90億ドルの追加支出を約束させられた。

地球はぐるぐる廻っている。ただし日本を中心に廻っている訳でもなければ、アメリカを中心に廻っている訳でもない。

「国際化」ないし「国際的になる」とは、通常心で、日本語で考え、日本語で表現し、通い合わないときはどちらかが何とはなしに折れるということではなく、きちん・きちんと句読点をうちながら、しっかり自己主張し合うことではないかと思う。

それが出来るためには、むちゃくちゃ英語かフランス語がうまくなるか、恐らくそれはほぼ不可能であろうから、国際的な交流の場では、徹底的に上手な通訳を介して、日本語的発想・日本語的表現で押し通すのがいいのではないかと思うようになったこの頃である。

## 後記

われわれ(筆者一家)のアメリカは、Mrs. Mildred Huber ぬきにはありえない。1964～66年にはじめて渡米したとき、家内の妹の当時高校生のF.がひょっとした機会で見合わせた、当時70歳近かったヒューバー夫人を紹介してくれた。

われわれは中西部のシカゴの近くに住み、彼女は New England に住んでいた。彼女は当時アメリカ人としては珍しく、anti-Viet Nam War であった。それだけでなく彼女は、変りもので、小生意気な筆者と、万事控え目な筆者の家内の組み合わせをこよなく愛してくれた。

長男の Shintaro は、当時英語しかできなかったが、“I’ve got three grand-mas.”といって、近所の子供達を煙にまいていた。筆者と家内の母親の2人に加えて、Huber さんのおばあちゃんである。

あの当時のアメリカでは、アパートも東洋人には open ではなかった(なかなか貸してもらえなかった)。筆者のようなものが、そっとアパートのカーテンのかげから、外で遊んでいる Shintaro の姿を見守っていた(差別されているのではないかと心配で)。

Huber さんのおばあちゃんは、われわれがたずねていくと、あちこちに自慢気に連れて廻り、こちらがかえって気恥しくなる程であった。一つには筆者の家内が、当時はなかなか美しく、しかも極めてしとやかだったからかもしれない。

それにしても、どうしてこんなにアメリカが嫌いになったのだろうか。恐らく、筆者が昇ってきた日本という太陽を背景に、劣等感が裏返しになり、気持ちがおごってきたからであろう。しかし同時に、沈みゆく太陽をひとの故にしかできない大多数のアメリカ人のさもしさ、心の貧しさの故でもあるように思われる。

筆者はまだ迷が多く、Huber さんのおばあちゃんのようにはなれない。とすると、せいぜいもっと英語の力をつけ、パンチのきいた皮肉の1つ2つでも言えるようになることしかないようにも思われる。

60歳を過ぎてこの心のゆとりのなさ。「国際化」とは如何にむつかしいことだろう。

## 国際学会開催を手伝っての感想

松浦利明

私の所属する農業経済学会は、本年8月、東京で第21回国際農業経済学会を持つことになっている。その手伝いをする過程で、様々なことを考えさせられている。また昨年9月、ハーグでひらかれたヨーロッパ農業経済学会にたまたま参加する機会があり、国際学会というものについて、比較検討をするチャンスに恵まれたので、そのことと合わせて幾つかの感想をまとめておきたい。

第一の印象は、日本で国際学会を開く、とりわけ物価水準の高い東京で開くということは想像していた以上に大変だということである。この大変さの中身の一つは、費用がとてつもなくかかるということにあるが、これにもまた幾つかの原因があげられる。まず第一に安い公設の国際会議場が東京には殆んどないという事情である。勿論、比較的規模の小さい会議場なら、それほど苦勞しなくても確保できる。しかし国際学会となると、私どものような小さい学会でも、千人規模のホールが必要になる。分科会だけなら大学の教室でも構わないかもしれないが、プレナリー・セッションとか歓迎パーティとなると大学では収用できるだけの施設がないのが現状である。そうした設備を供給できるのは、今のところ大きなホテルだけであるが、この使用料が高いのである。

オランダのハーグは、その点では非常に恵まれた条件を持っていた。公設の国際会議用の kongress・ホールの立派なのがつくられていて、そこでプレナリーから分科会まですべて処理できる。ハーグは国際会議の貸し席として、ジュネーブとならぶ実績をほこる都市だから、特別だというわけでもなさそうだ。欧米の100万都市なら、大抵この種の会議場は持っている。1987年のハンガリアでもたれたEAAEも、バラトン湖畔の保養所兼会議場で十分であった。勿論、日本のホテルなみのサービスは望めなくても、コストの安さの魅力のほうをはるかに大きかった。参加者全員が同じ保養所の3階から8階に5日間宿泊し、おなじ食堂で三度同じ飯を食べることで、むしろ国際交流の成果は大きかったように思われた。

東京のホテルを会議場として使うとなると、1週間で会場費だけで優に3千万円は下らない。京都には、国際学会用の公共施設があり、予約がかなり先まで一杯だと聞くが、学会組織との関係からいうと、場所だけ京都というわけにはいかない場合が多いようである。それに国際学会というのは、9月早々はじまるアメリカの学期に合わせて設定されるケースが多いから、開催時期も競合しやすい。せめて東京あるいはその近郊に、国が国際学会用の施設

を作ってくれば、国際学会の開催ももう少し気楽に引き受けられよう。リッチカントリー・ジャパンということで、どの学会でも日本開催を拒否できなくなっている。私どもの学会もこれまで何度も開催を要請されたが、その都度理由をこしらえて引き延ばしてきたのが実情である。8年前は、すったもんだの末、インドネシアに代わって貰う始末であった。

会議場所の問題とも関連するが、東京の物価高、とりわけホテル料金の高さも頭痛の種である。訪れるサイドからすると、選択の幅が狭いことが一番問題のようである。われわれの場合だと、A、B、Cの3ランクのホテル（15,000円-30,000円/ツイン）を用意したが、問題は一番安いクラスの料金である。新宿のホテルを主会場にしたため、ホテル料金がどうしても割り高になってしまったという事情もあるが、矢張り一泊最低100ドル以上というのは、問題を残しそうだ。ハーグの場合、ホテル料金にはかなりの選択幅があったし、さらにキャンプ施設やユースホステルまで用意されていた。料金の高さと部屋の小ささで、連中のブーイングが今から聞こえてきそうである。一番でっとりばやい解決手段は、開催地在住の会員の住居に宿泊してもらえればいいのだが、「兎小屋」の住居条件のもとではそうもいかない。結局、ソフトカレンシイ国からくる参加者にたいして、いくらかの補助を出すということでお茶を濁すしかない。

航空料金のほうは、参加者はなんらかの補助付き旅費、あるいはチャーター便を確保してくるケースが多いから、予算枠で縛られる滞在費の高いのが一番シリアスになる。準備の過程で、新宿西口に立地するホテルを結構見せて貰ったが、部屋の狭さに一番抵抗感があった。「皆さんは地価500万ドル(20㎡の床面積として)の部屋の住人なんですよ。これがエルドラド日本の実態です。」とジョークでまぎらわすしか手がなさそうである。こんな高いホテルでも、現在、ホテルの需給は売り手市場であり、とくに世界陸上選手権大会（参加者5000人）と日程的に重なる我々の場合は、料金交渉よりも部屋を確保するのが精一杯という有様である。

会場費とならんで大きな出費が、パーティ費用である。通常は、歓迎パーティ（開催国負担）とフェアウエル・パーティ（有料だが大部分は主催者の持ち出し）をやることとなっているが、これも人数の関係から大ホテルの厄介にならざるをえない。となるといくら立食形式にしてもコストはかかる。二つのパーティを合わせると、会場費と同じぐらいと考えてよい。日本での国際学会は結構パーティを派手にやるのが慣例になってしまっている。遠いところから来てくださった客をもてなすというマンタリテにおいては、人後におちないのがわが民族性である。会話力の不足を御馳走で補うという皮肉な解釈も成り立たなくもないが、ここは善意に受け取りたい。国際学会といっても、一面では「お祭り」の要素が多分にある。

目をつりあげて8日間ぶっとうして報告を聞くなんていうのはまずくない。そこでいかにお祭りを盛り上げるかという、やや学会とはそぐわない課題が重要になってくる。

オランダの学会の場合は、歓迎パーティを極めて質素にして、さよならパーティに全力を投入するという戦術であった。パーティがあったにもかかわらず、参加者はもう一度きちんと夕食をとらないと、とても安眠できかねたといえ、その中身は察して頂けよう。しかしさよならパーティのほうは、見事な演出だった。パーティの前に、2時間クラシック演奏会を持ち、十分に胃を空にしておいてから、夜の10時に始まったパーティはクレシェンドにも似た盛り上がりであった。連中は学会期間全体を一つの流れとして捉え、演出しようと思図していたように思われる。我々はどうも一つ一つの行事の成否に目が行き勝ちで、全体を計画し、演出するという発想に欠けるところがある（この点は日本の街づくり、大学づくりにも共通しているが）。ここらで諸外国のこうした知恵に学んで、パーティを手直しすることも考えていいのかもしれない。

会場費とパーティ費の二つをあわせると、支出全体の約半分近くになる。あと大きな費用項目としては、同時通訳費、広報費（英文、和文の各サーキュラー作成費）であるが、これも日本で開催となると結構高くつくことになる。同時通訳は、英語だけでなく、フランス語もオフィシャル・ランゲージになっているところから、日→英、日→仏、英→仏と三コース必要になる。英語国ないし英語が一般に使われている国の場合、英→仏だけでいい。オランダの場合もハンガリーの場合も、同時通訳は英・仏間だけであった。日本の場合、日本人の参加者が全体の60%から70%をしめるということを前提にすると、日・英間の同時通訳を省くわけには行かない。なんとかフランス語を勘弁してもらおうと交渉したが、拒否されてしまった。実際には参加するフランス人は例外なく英語を理解し、支障なく議論できると推測されるのであるが、この問題になるとフランス人は、妙に愛国者になってしまう。英・仏なんていう同時通訳者は、日本ではなかなか確保できるものではない。この結果、1000万円近くの同時通訳料が必要になる。サーキュラー作成費も馬鹿にならない。都合三回英文サーキュラーを作成しなければならないが、翻訳を外注する関係もあっていい値段である。今日では国際学会専門の事務請負会社が出来ていて、かなりの事務作業は処理してくれる。むしろそうした機関のサポートなしには、日本では国際学会なぞ開催できないといってよいかもしれない。

最後に一番多いと思われるのだが、具体的金額としては計上されないコストがある。それは国際学会開催の組織化費用とでもいうべきもので、多くの会員が会議開催のため様々な仕事をしなければならない。その多くは準備のための会議である。この準備のための会議にさ



かれる時間を、機会費用で計算すれば、おそらく最大の費用項目となるに違いない。とくに東京ないしその近辺の基幹大学のスタッフが払う労力は非常なものである。国際化ということで付き合わざるをえない国際学会開催のエレジーとでもいえようか。日本的に学会あげて事にあたろうとするから、会議も全国から召集ということにならざるをえない。シンポジウムと違って、この種の大会は一回やれば30年はまわってこない。たまたま開催にあたった世代は、運が悪いと諦めるしかない。環境問題などでも世代間分担が一つの焦点になっているが、それと似ていなくもない。会員負担の問題にしても、せいぜい積み立て期間は5年ぐらいであるから、負担の集中が生ずる。学会によっては、積み立てを長期で考え、世代間のアンバランスを少なくしているところもあるらしい。資金のほうは、いろいろ対処もあろうが、出役負担のほうはどうにもならない。

このへんで収入編に移ろう。「国際学会だと寄付集めで大変だろう」というのが、通り相場である。まあ景気のいい業界をバックにもっている学会であれば、すこしは楽かもしれないが、社会科学の学会となると、普段から付き合いのある応援団は、極めて少ない。それだけに寄付集めは大変である。金にかかわること故、関係者が直接でむいて頭を下げなければならないだけに、その渉にあたる人にとってはかなりの重荷になる。

収入は一般的には会費（登録料）、会員寄付金、一般寄付、国の補助（日本学術会議）からなる。普通、収入の半分以上は、会員以外の寄付でまかなわれると考えていい。このなかで意外に少ないのが補助金であり、多分10%以下である。しかも公的な補助金を受ける場合、一定の学会負担がオブリケーションになる。これは国の補助金の場合、大抵受益者負担が条件になっているから、国際学会開催の場合も同じプリンシプルが適用されていると考えてよい。問題は補助率ということになるが、収益目的でない学術事業という性格を考えた場合、現状は低すぎる。その結果、補助金を貰うために、学会が自己負担しなければならない部分が、大きくならざるをえない仕組みになっている。

自己負担は、会員に対する寄付、会議参加のための登録料、学会積み立み（学会費の臨時増額の形をとる）といったものである。私共の場合、会員の寄付は教授クラス6万円、助教授クラスで3万円という一応の基準が作られている。学会員の数千人をきる小学会なので、始めに目標額が決められ、一定の応募率を見込んで基準が設定されることになる。寄付だから任意というのは建前だけで、今の日本の仕組みの下では、これを集めないことには、国際学会は開けないといってよい。従って実際は半ば強制と考えるほうが現実にあっている。国際学会を組織する側からすれば、誘致を決めた以上は強制に近いものと考えて欲しいが、出すほうの理屈はそうはいかない。「寄付はあくまで寄付だ」ということになり、任意原則が主

張されフリクションの種になる。

寄付と関連するが、通常5万円以上の寄付には、免税措置がある。しかしこれにも限度額があり、一般の寄付と合算して計算される。免税枠は大蔵省に申請して貰うわけであるが、寄付全体額が対象となるわけではない。一般からの（具体的には企業・団体）寄付を頂く場合は、当然免税枠は優先的に回すことが通念になっている。その結果、会員の寄付はなるべく免税枠を遠慮されたしということになり、貧しい個人は一層不利になる仕組みになっている。この会員寄付の総収入にしめる比率は、我々の場合だと、15%程度と見込まれている。このほか寄付に近いものとして、学会費の臨時増があげられるが、我々の場合1万円（2000円×5年間）だったと記憶している。しかし私共の寄付は、他の学会に比し特に高いというわけではなく、もっと多いのも結構あると聞いている。

次に登録料収入であるが、我々のケースでは、海外参加者と国内参加者で異なる額が決められた（海外での学会では多分均一の登録料が普通であろう）。これも建前からすれば、両者に差をつけるというのは、筋の通らないことであろう。行政官庁へ提出する計画書の段階で、ほぼ登録料収入の総額は決まってしまう。前にも言ったように、日本の現行システムでは、100%外部寄付金だけで国際学会を開くわけにはいかない。内部の資金提供がオブリケーションになっているのである。登録料も会員寄付とならんで重要な内部資金であるから、外部寄付が集まったから安くするというわけには行かない。国内参加者の場合、40歳以上6万円（早期登録の場合）、以下の場合3万円、海外参加者の場合、一律3.2万円という形で決まった。海外登録料をかなり低くしたのは、一定の参加者を確保したいという願いからであり、国内参加に差をつけたのは参加者を多くして登録料収入を確保したいからである。登録料収入は全体の20%を越す重要な内部財源であり、馬鹿にしえない。以上会員寄付と登録料を合計したものが、学会自己負担分ということで、全体の40%ぐらいになると思われる。

登録料については、公費負担が問題になっている。これは主として公立大学ないし公立試験機関で問題になるが、形式的には支出可能（研究費から）という判断が、会計検査院から出されている。しかしこれも建前の話で、現実にはなかなか難しい問題がある。研究費の支出については、各機関によって内部的な約束があり、その制約から国際学会の参加登録料は認められていないケースが多いようである。それでなくとも少ない研究費から払うというのは、研究者にとっては実質的に研究費がそれだけ削られるということで、それほど有難いことでもない。

というわけでかなりの自己負担を前提にしても、今の日本では一般寄付がない限り、国際学会は容易に開けないということである。私共の場合でも多分50%から60%は企業・団体の

好意に頼ることになる。なにかにつけ産学協同が批判的になるが、国際学会開催ほど「産」の協力を仰ぐ仕組みになっているものはないといってよいだろう。この点、海外の場合をみると、部外からの寄付も確かにあるが、その程度ははるかに小さいようである。楽屋裏のことで確かめられなかったが、寄付企業や団体のリストをみる限りでは、桁が違っている。それだけ学会組織の労力も少なくすむわけである。

これから実際の開催にむけて忙しくなるが、多分その過程で様々なフリクションが出てくると予想される。これまではどちらかという国内での摩擦であったが、これからは国外との摩擦が主になってくるだろう。情ない話であるが、今頭が痛いのは、コーヒブレイクと昼食、それと成田接遇のことである。コーヒブレイクは、どの学会でも一日二回無料で提供することが、登録料の範囲内のサービスとして、サーキュラーにも記載されている。大抵、部屋の片隅にインスタントのコーヒが、紙コップともども用意され、あとは各自セルフサービスで飲めばよい仕掛けになっている。ところが名の通ったホテルを会場に使う場合、飲食の持ち込みは認めて貰えない。勿論、インスタントコーヒも同様である。ホテル側の用意したコーヒをとるか、ブレイクなしか、会場の外まで行くしかない。ホテルの高いコーヒをとり、無料とすると、これだけで会期全体で5~600万はとんでしまう計算になる。現物寄付でインスタントコーヒは貰ってきても、残念ながら生かせない始末である。つまらない問題で、我々の世界の商業主義を思いしらされている。

同様に昼食も厄介な問題になってきている。これには開催場所が新宿西口という、日本人でも昼食確保が大変だという立地条件が働いている。都庁が移転するから、この問題は一層きびしくなる。学会の昼食時間をうんと繰り下げでもしない限り、混乱は避けられそうもない。弁当を配るということが、またホテルコードにひっかかる。

成田問題もいかにも日本的な問題といってよい。海外での学会だと、こんな問題は絶対生じないからである。子供の遠足ではあるまいし、指定した場所に指定された時間集まることに気を使い、そのために成田接遇チームを組織しなければならないとは、まさに漫画である。これには成田国際空港の惨状と8月20日前後の混雑、加えて日本の交通案内表示の不親切さ、海外から初めて来日する人への思いやり(むしろ悪い第一印象を与えては恥という)といった多くの要因があつてのことである。

日本の学会の国際化は、なんと非国際的な行為の積みかさねの上に進んでいくことか、わずかな見聞からも思いしらされるのである。国際学会がもっと気楽に引き受けられ、そのなかで本当の交流が実を結ぶ日を期待しながら、なお暫くはやや虚しい組織委の手伝いに今年の前半は終始しそうである。

(本稿はもともとは昨年開催されたヨーロッパ農業経済学会の報告，とりわけソ連や東欧のゆれ動く農業問題に焦点をあわせて書く予定であった。それがこんなとりとめもない一文になってしまったのは，全く私の怠慢であるが，森さんの寄稿が研究者間の国際化問題を扱っているというので，国際学会開催という面から国際化を見てみようとしたわけであるが，入口の話で終わってしまった。)

#### <編集後記>

本号は，農業経済学を専攻する二人の研究者による「国際化」をめぐる体験的エッセイです。松浦所員の文章からは，日本の現状ではまともな国際会議を開くことが如何に困難であるのか，ということを痛切に知らされた。西欧文明においては，おそらくはギリシアの時代から，議論をするための場所と建物の存在というものが都市空間における重要な要素になっていたのではないのか。省みるに我が日本の都市の伝統において，そのような建物や空間というものは存在してきたのだろうか，などということも考えさせられました。

森所員のアメリカ「批判」は，アンビヴァレントで両義的なのかもしれませんが，問題はアメリカそのものにあるというよりも，そのアメリカとつきあう日本人の側にある。との印象を受けました。(R. I.)

---

神奈川県川崎市多摩区東三田2丁目1番1号 電話(044)911-7131(内線2818)

専修大学社会科学研究所

(発行者) 三輪芳郎

製作 佐藤印刷株式会社

東京都渋谷区神宮前2-10-2 電話(03)3404-2561

---